



■■■ショートコメント■■■

◆インド映画である本作の原題『ヒンディー・ミディアム』は日本人には全くわからないから、本来は当然邦題を付けなければならないのに、そのままのタイトルにしたのは、きっと適当な邦題を思いつかなかったため。もっとも、チラシには「英語が話せないなんて！」と大きく書いてあるから、一瞬これが邦題かと思ってしまったが・・・。

チラシによれば、『ヒンディー・ミディアム』とは次のとおりだ。

インドで「ヒンディー語で授業を行う公立学校」のことを指す。対して、英語で授業を行う私立の名門校は“English Medium”とされ、英語は、現代インドでよい仕事を得るための必須スキルとされ、教育の質を測る上で重要視されている。本作は、インドで実際にあった父親が学位しか持っていなかったため娘の入学を拒否されたという驚愕の出来事をもとに、ラージとミータと同じように高等教育を受けることができなかった親達への丁寧なヒアリングを礎に制作された。

◆また、『ヒンディー・ミディアム』公式サイトにある INTRODUCTION は次のとおりだ。

デリーの町で衣料品店を営んでいるラージ・パトラは、妻のミータと娘のピアの3人暮らし。将来のため、娘に進学校を受験させることを決意するが、親の学歴まで調べられることが発覚。彼らは娘のため、高級住宅地に引っ越し、あらゆる手を使って試験に臨むが、結果は全滅。それもそのはず、名門校は親の学歴も調査するのだった。落胆する2人だったが、ある進学校が低所得者層のために入学に優先枠を設けていることを知る。受験の失敗続きで追い詰められた夫妻は下流層が暮らす地区に家を買って低所得者になりすまし、優先枠での入学を狙うが・・・

2017年のインドで大ヒットを飛ばした本作は、『アメイズング・スパイダーマン』『インフェルノ』など多くのハリウッド映画に出演するイルファーン・カーン主演！家族思いのおおらが、でもどこか抜けたところがある父親をコミカルに演じ、国際インド映画アカデミー賞、スター・スクリーン賞、フィルムフェア賞で主演男優賞を受賞。ラージの美しき妻で教育ママでのミータを演じるサバー・カマルは、パキスタンのトップ女優で本作がインド映画初出演。彼らが魅せる凸凹夫婦の軽妙なコンビぶりに乞うご期待！

監督は、シャー・ルク・カーン主演『アショカ大王』（映画祭上映）で脚本を共同で担当し、『結婚の裏側』（映画祭上映）などを手がけたリサケート・チョードリー。本作で国際インド映画アカデミー賞監督賞、フィルムフェア賞作品賞を獲得した。

◆そして、『ヒンディー・ミディアム』公式サイトにある STORY は次のとおりだ。

インド・デリーに住むミドルクラスの夫婦ラージ（イルファーン・カーン）とミータ（サバー・カマル）は、衣料品店の経営で成功を取っているが、妻のミータは学歴コンプレックス。教育は社会的地位を向上させ、運命を変えると強く信じて疑わない。一人娘のピアに、よりよい人生を歩んで欲しいと願い、富裕層向けの有名校に進学させることにした。娘が上流社会入りできるよう、両親は娘と共に受験クラスで面接のノウハウや試験のコツを学び、高級住宅地へ引っ越して富裕層のふりまですて必死に受験を迎えるが、なんと結果は全敗。落胆する2人だったが、とある有名校が低所得者層のための入学枠を設けているという情報が舞い込む。わらをも掴む思いの彼らは、下流層が暮らす地区に軍を借りて葛藤を繰り、ついには不正行為も辞さず、有名校の低所得者層枠での入学を試みる。夫婦は愛する娘のためにあらゆる手を尽くすし、お受験戦争はどんどんエスカレートしていくが・・・！？

◆日本でも「お受験もの」は1つのジャンルとして定着しているが、それは学歴社会で格差の大きい韓国でも同じ。それはすぐに想像できるが、実はそれはインドでも！

インドは2ケタの九九ができる国として有名だが、今ではそんな数学の能力以上に、英語が不可欠。そしてまた、上流階級に属し支配階級になっていくためには一流校の卒業が不可欠だが、そのためには何が何でも一流校に入学しなければ！そして、一流大学に入学するためには中学、高校の受験競争に勝ち抜く必要があるが、そのためにはまずは小学校の「お受験」に勝たなければ！

もっとも、本作に登場する「受験コンサルタント」の言葉によると、今やインドのお受験戦争は「皆さん妊娠3カ月の時点で私の指導を予約します」というほど加熱しているそうだが・・・。

◆今ドキは日本では、子供の学校（学区）のために両親の住所地を変更するくらいのごく常識。しかして、本作導入部では、娘のピアのために父親のラージ・バトラ（イルファーン・カーン）と母親のミータ・バトラ（サバー・カマル）が高級住宅地に引っ越し、お受験コンサルタントへの依頼の他、ワイロを含む（？）あらゆる手を尽くす姿が描かれる。それはそれで面白いが、本作の真骨頂は、ある進学校における「低所得者層のための優先枠」があるという話を聞いてからのストーリーだ。

従業員の子供が入学できたことを聞いたラージとミータの決断は？ここからは、日本のお受験モノの定番をはるかに通り超え、ホントにここまでやるの？というビックリするストーリーが続いていくので、それに注目！

◆私の小学生時代にも、某校への進学については「最後は抽選」というシステムだったが、ラージとミータが、低所得者層に住む地区（ハッキリ言って貧民窟）に引っ越しまでして入学を狙った某校も最後はそれ。しかして、ラージとミータ夫婦に良くしてくれた某貧乏人夫婦の子供は抽選で落ちたが、ピアは当選したから、万々歳！いやいや、それで終わらないのが本作が大ヒットした理由だ。

私も常々実感しているが、金持ち同士のうわべだけの付き合いは何かとインチキが多いが、貧乏人同士の付き合いは本音が多いもの。それを実感してきたラージは、今やピアが低所得者層枠で入学できたことを恥じ、それを高潔な教育思想の持ち主である校長先生に

打ち明けることに。それはラージにとっての一大決心だったが、さて、高潔な教育思想の裏側は・・・？

◆本作ラストは講堂の演壇を乗っ取った形でのラージの演説になるが、それが本作のクライマックス。これは、ストーリーの流れとしてかなり違和感があり、いかにもコメディタッチの演出になっているが、演説の内容はなかなかのものだ。そこでラージは、やっと入学できた自分の娘の権利を放棄することを宣言したが、さて、それに続く善意の親たちは・・・？

何が正義で何が不正義？何が善意で何がインチキ？お受験の現場ではそれがよくわからないうえ、そのシステムを牛耳っている政治家、学校幹部、そしてマスコミを含むさまざまな関連団体にはびこる悪習がある。本作はそんな実態を赤裸々に見せてくれるが、ラージとミータの奮闘にもかかわらず、その解決にはほど遠いことがよくわかる。最も大事なものは2人の子供ピアの幸せだが、有名な私立校から貧困な公立校に移ったピアの幸せは？そして、その教育のあり方とは・・・？

2019（令和元）年9月19日記